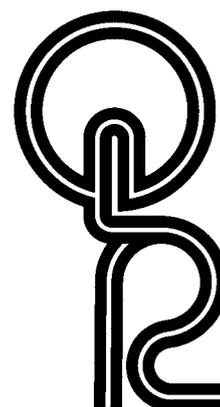


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 32 No.3, 2025



郷村断層（樋口地区）の保存施設。郷村断層は、1927（昭和2）年3月7日の北丹後地震で出現した。その変位が明瞭な場所、3ヶ所が、1929（昭和4）年に国指定の天然記念物に指定されている。樋口地区では、小屋が建てられて保存されているが、ガラス越しに見ることとなるため断層の様子は観察しにくい。2022年1月撮影。（文・写真：目代邦康）

Vol. 32 No. 3

August 1, 2025

2025年大会案内（第4報）..... 2	2025-2026年度役員名簿..... 18
総会・評議員会のお知らせ..... 10	2025-2026年度役員選挙の結果（答申）..... 20
学会賞選考委員会報告..... 10	第1回評議員会議事録..... 21
論文賞選考委員会報告..... 13	第1回執行部会議事録..... 23
第5回評議員会議事録..... 15	会員消息..... 23
第5回執行部会議事録..... 17	

◆日本第四紀学会 2025 年大会案内 (第4報)

1. 全体概要

開催会場：島根大学松江キャンパス

(〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060、最寄バス停：島根大学前 (JR 松江駅から 15～20 分))

https://www.shimane-u.ac.jp/nyushi/transport_access/campus_map/campus_map01.html

開催日程 (全期間)：2025 年 8 月 28 日～9 月 1 日

8 月 28 日 (木) 専門巡検 1 (植生)、評議員会

8 月 29 日 (金) 一般研究発表 (口頭およびポスター)

8 月 30 日 (土) 一般研究発表 (口頭およびポスター)、総会・授賞式 (ハイブリッド形式)、懇親会

8 月 31 日 (日) シンポジウム (公開)、普及講演会

9 月 1 日 (月) 専門巡検 2 (大山)、専門巡検 3 (三瓶とたたら)

共催：島根大学

エスチュアリー研究センター・総合博物館 (シンポジウム・普及講演会)

日本植生史学会 (専門巡検 1 植生のみ)

2. 大会参加について

大会専用サイト <https://sites.google.com/view/2025jaqua/> から申し込んでください。申込方法の詳細については、大会専用サイトを通じてお知らせします。申込および支払い方法など詳細は、大会専用サイトをご確認ください。

※大会参加申込、懇親会申込の締切：8 月 22 日 (金)

※キャンセルポリシー (大会参加・懇親会)：申し込み後に大会参加および懇親会をキャンセルした場合、8 月 28 日までに連絡があった場合は全額返金しますが、それ以降は返金しません。

1) 大会参加費 (日本第四紀学会は免税事業者のため、大会参加費は会員・非会員ともに不課税です。)

会員 (一般、70 歳未満)：1,000 円

会員 (大学院生・学部生)：無料

非会員 (一般、大学院生・学部生)：2,000 円

70 歳以上の会員、および、8 月 31 日のみ参加する方：無料

2) 懇親会

一般、大学院生・学部生：6,000 円

3) 専門巡検

専門巡検 1 プレ植生 (会員か日本植生史学会員)：2,000 円

専門巡検 2 ポスト大山 (会員のみ)：3,000 円

専門巡検 3 ポスト三瓶たたら (会員のみ)：6,000 円

※巡検参加費にはレクリエーション保険代が含まれます。

※キャンセルポリシー (専門巡検)：申し込み後に参加をキャンセルした場合、実施日の 1 週間前まで (専門巡検 1 は 8/20、専門巡検 2 と 3 は 8/24) は参加料金を全額返金しますが、それ以降は返金しません。

3. スケジュール・会場

8 月 28 日 (木)	9:00～17:00	専門巡検 1
	(15:00～18:00 予定)	評議員会)
8 月 29 日 (金)	9:00～	受付
	9:30～11:45	口頭発表
	11:45～12:15	ポスターショートトーク

	13:15 ~ 14:30	ポスター発表
	14:30 ~ 17:30	口頭発表
8月30日(土)	9:00 ~	受付
	9:30 ~ 11:45	口頭発表
	11:45 ~ 12:15	ポスターショートトーク
	13:15 ~ 14:30	ポスター発表
	14:30 ~ 15:30	口頭発表
	15:45 ~ 17:45	総会・授賞式 (Zoom ハイブリッド)
	18:00 ~ 20:00	懇親会
8月31日(日)	8:30 ~	受付
	9:00 ~ 12:30	シンポジウム (公開)
	13:00 ~	受付
	13:30 ~ 15:00	普及講演会 (公開)
9月1日(月)	8:00 ~ 17:00	専門巡検2、専門巡検3

会場：島根大学松江キャンパス

- ・大学ホール：口頭発表、総会、シンポジウム、普及講演会
- ・教養講義棟1号館102教室：休憩室
- ・教養講義棟1号館101教室：企業展示・評議員会
- ・教養講義棟1号館201教室：ポスター発表
- ・第二食堂 ニコラ2階：懇親会

4. 一般研究発表プログラム (7/17 時点)

口頭発表 (31件)

(☆：若手発表賞エントリー、★：学生発表賞エントリー)

8月29日(金)

- O-01 奥野 充 (大阪公立大)・石賀 敏 (鳥取県地学会)・中岡礼奈 (神戸大)・Auer Andreas (島根大)・小林哲夫 (京都大)「大山火山の完新世噴火活動」
- O-02 宮縁育夫 (熊本大)・飯塚義之 (中央研究院)・緒方裕也 (テレビ熊本)「阿蘇火山中岳火口周辺域における最近約800年間のテフラ層序」
- O-03 中里裕臣 (産総研)・岩本直哉 (銚子ジオパーク推進協議会・銚子市教育委員会)・岡崎浩子 (深田地質研)「千葉県北東部銚子市における浅間火山起源テフラの検出」
- O-04 鈴木毅彦・川畑美桜子 (東京都立大)・段上清香 (日本公営)・國分邦紀・川島眞一・中山俊雄 (東京都土木技術支援センター)「多摩川中流域、多摩市関戸における多摩コア中の前期更新世テフラとその対比」
- O-05 藤木利之 (岡山理大)・山田和芳・岡野美郷・西野愛理 (早稲田大)・瀬戸浩二・香月興太・鹿島 薫・辻本 彰 (島根大)・田中陶子 (大阪公立大)・中西利典 (ふじみュー)「松江城四十間堀川から得られた堆積物の花粉分析による都市環境の変化」
- O-06 鹿島 薫 (島根大・国立中正大)・福本 侑 (島根大)「松江城堀コア試料から得られた珪藻遺骸群集；DAIpo (珪藻汚濁指数) の人新世環境変動史への応用」
- O-07 Aan Dianto, Tetsuya Sakai, Koji Seto, Kota Katuki (Shimane Univ.), Toshimichi Nakanisi (Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka), and Yoshiki Saito (Shimane Univ.)「Holocene coastal evolution and paleogeography of the Izumo Plain and Lake Shinji, Shimane Prefecture: A result from the NH23 core」
- O-08 Anjila Babu Malla, Toshihide Shibi and Tetsuya Sakai (Shimane Univ.)「Geotechnical and Stratigraphic Characteristics of Holocene Deltaic Sediments in the Izumo Plain, Japan」

大会案内 (第4報)

- O-09 山内一彦 (山口県立徳山高)・白石健一郎 (山口県立高森高)「中国山地西部, 筒賀一宇佐郷断層帯と大原湖断層帯の間に分布する活断層」
- O-10 石村大輔 (千葉大)「2016年熊本地震で出現した断層の古地震履歴とその同時性」
- O-11 ★中野颯太・菅原大助 (東北大)「粒度組成に着目した貞観津波堆積物形成時の津波外力推定」
- O-12 猪瀬大輝・菅原大助・石澤堯史・増田英敏 (東北大)「青森県むつ市出戸川沿岸低地における古津波堆積物調査と堆積環境の推定」
- O-13 北村晃寿 (静岡大)・亀尾浩司 (千葉大)・齊藤 毅 (名城大)・河瀨俊吾 (横浜国立大)・守屋和佳 (早稲田大)「微化石層序学的研究に基づく熱海土石流堆積物に含まれる軟質泥岩礫の供給源」
- O-14 奥野淳一 (極地研)「ハイドロアイソスタシーの数値モデルによる第四紀後期以降の日本列島古地理変遷」
- O-15 入月俊明・猪谷ゆりあ・鳥江夏希 (島根大)・田辺 晋・納谷友規 (産総研)「岡山平野南西部における完新世の貝形虫群集と相対的海水準の時系列変化」
- O-16 植村 立 (名古屋大)・三嶋 悟・中村光樹 (琉球大)・浅海竜司 (東北大)・加藤大和 (帝京科学大)・狩野彰宏 (東京大)・Chen Jin-Ping・Shen Chuan-Chou (台湾大)「鍾乳石の同位体比分析に基づく東アジアモンスーン地域の離島における最終退氷期の温暖化と降水同位体比の非同期的変化」
- O-17 瀬戸浩二・香月興太 (島根大)・園田 武 (東京農大)・安藤卓人 (秋田大)・仲村康秀 (島根大)「北海道藻琴湖における碎屑性年縞堆積物による過去 100 年の堆積環境の変化」
- O-18 香月興太・瀬戸浩二・仲村康秀・辻本 彰 (島根大)・山田和芳 (早稲田大)・園田 武 (東京農大)「海跡湖の炭素貯蔵量の変遷におよぼす人為活動の影響」
- O-19 池原 実 (高知大)「「スーパー間氷期」の初期の意味とその用法の変遷」

8月30日(土)

- O-20 ☆渡邊稜也・江口誠一 (日本大)・藏本隆博 (秋芳町地方文化研究会)「山口県秋吉台北西部の植物珪酸体分析からみた植生景観の変遷と地点間の比較」
- O-21 渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント・島根大)・田畑直彦 (山口大)「山口県南東部, 島田川中流域の古植生変遷」
- O-22 酒井和也・吉田明弘 (鹿児島大)「北海道函館沖海底コアの花分析による最終氷期における北海道南西部沿岸の古植生復元」
- O-23 ☆林 尚輝 (鹿児島大)・山岡拓也 (静岡大)・池谷信之 (明治大)・前嶋秀張 (沼津市)・高倉 純 (札幌国際大)・小林 淳 (静岡県富士山世界遺産センター)・林 竜馬 (琵琶湖博)・山本正伸 (北海道大)・佐瀬 隆 (北方ファイトリス研究室)・細野 衛 (東京自然史研究機構)「静岡県沼津市東大平遺跡の後期旧石器時代以降の植生と火事の歴史」
- O-24 ★岩寄広大 (大阪公立大)・河村 愛 (富山大)・河村善也 (大阪市立自然史博)・齊藤 毅 (名城大)・百原 新 (千葉大)・張 鈞翔 (中華民国国立自然科学博)・三田村宗樹 (川崎地質)「台湾南西部菜寮地域の完新世段丘堆積物に含まれる化石と考古遺物」
- O-25 河村善也 (大阪市立自然史博)・河村 愛 (富山大)「沖縄県石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡のイノシシ類遺体の追加標本の研究—これまでの研究の再検討も含めて—」
- O-26 ★山田佑哉・辻 智大 (山口大)・角野浩史 (東京大)「青野山火山群, 長者ヶ原の形成年代に基づく佐波川の地形発達」
- O-27 ☆内田真緒・小形 学・小松哲也・西山成哲・奈良郁子・木田福香・小北康弘 (JAEA)・中西利典 (ふじみュー)「大井川上流域の環流旧河谷に残された湖成堆積物の堆積環境の推定」
- O-28 納谷友規・田辺 晋・水野清秀 (産総研)・本郷美佐緒 (アルプス調査所)・小網晴男 (岡山朝日高)・鈴木茂之 (岡山大)「ボーリングコアの解析による岡山平野地下更新統層序の予察的検討」
- O-29 廣田清治・木村 誇 (愛媛大)「山林火災跡に見られた斜面保護工の効果 - 積苗工の事例」
- O-30 香川 淳 (千葉県環境研究センター)・古野邦雄 (元 地質環境研究室)「関東地下水盆南東部における観測井孔内地下水温度と地下水流動」
- O-31 小松原 琢 (琵琶湖博)「日本海東縁新生プレート境界説ふたたび」

ポスター発表 (28件)

(☆:若手発表賞エントリー、★:学生発表賞エントリー)

(コアタイム 8/29:P-01~P-14 8/30:P-15~P-28)

- P-01 藤根 久 (パレオ・ラボ)・領塚正浩 (市立市川考古博)・森知磨依 (パレオ・ラボ)「遺跡から検出された漂着軽石群」
- P-02 河合貴之 (栗駒山麓ジオパーク推進協議会)「中期更新世後半に噴出した小僧テフラの栗原地域における追跡に基づく周辺地域の火山活動及び地形面編年に関する二, 三の予察」
- P-03 ☆吉田一希 (国土地理院)「0.5m DEM 地形判読に基づく大山火山の鳥越峠付近における推定火口列の発見」
- P-04 佐々木俊法 (電中研)・上野龍之・後藤憲央 (阪神コンサルタンツ)・家島大輔・清木祥平・藤原在希 (中国電力)「兵庫県沖海底コア IODP U1427A の約 1Ma ~ 0.2Ma に記録された火山活動履歴の推定」
- P-05 西澤文勝 (神奈川県立生命の星・地球博)・鈴木毅彦 (東京都立大)・山田圭太郎 (山形大)「中部九州、阿蘇野層中に挟在する白まるバンドの広域対比の再検討」
- P-06 青木かおり (北海学園大)「現代日本語と古語の中の“かるいし”の比較—その使用方法と意味の変容—」
- P-07 ★辻森律己 (東京都立大)・石村大輔 (千葉大)・平峰玲緒奈 (歴博)・渡辺 樹・本間海那 (東京都立大)「能登半島北東部, 平床台地の海成段丘構成層から見出された三瓶木次テフラの降下火山灰層と漂着軽石」
- P-08 北村 繁 (新潟大)・村野正景 (静岡大)・市川 彰 (国立民族学博)「中米・エルサルバドルのウスルタン様式土器に含まれる火山ガラス」
- P-09 矢作健二・坂元秀平・松元美由紀 (パリオ・サーヴェイ)・長井大輔 (雲仙岳災害記念財団)・濱村一成・前田加美・新井実和・小川慶晴 (長崎県)・小林哲夫 (京都大)・井上 弦 (東海大)「雲仙火山北東麓における火山灰土層中のテフラ層序」
- P-10 山田和芳・岡野美郷・金子純也 (早稲田大)・藤木利之 (岡山理科大)・中西利典 (ふじみュー)・瀬戸浩二・香月興太・辻本 彰・鹿島 薫 (島根大)・井上 淳 (大阪公立大)「人工水域堆積物を用いた都市環境史復元の可能性と課題」
- P-11 ☆酒井恵祐・坂井正人 (山形大)「ペルー・ナスカ地域における現生植物 (乾季) の花粉形態の予察的研究」
- P-12 堀 和明・山本 誉・前田優樹 (東北大)・田村 亨・石井祐次 (産総研)・中西利典 (ふじみュー)・洪 完 (KIGAM)「保倉川下流低地の沖積層」
- P-13 白井正明・諸岡知足 (東京都立大)・河尻清和 (相模原市博)「猿橋近辺における富士—相模川ラハール堆積物の層相記載と年代測定の試み」
- P-14 ★稲野邊健央 (秋田大)・Stephen Obrochta (秋田大)・久保田好美 (国立科学博)「浮遊性有孔虫 *G.ruber* を用いた酸素同位体比分析に基づく東シナ海における気候変動の環境復元」
- P-15 福與直人 (法政大)・横山祐典 (東京大)「フィルター処理と水銀添加が奄美大島表層水の溶存無機炭素 (DIC) の放射性炭素濃度に与える影響評価: 予察」
- P-16 宮入陽介・阿瀬貴博・横山祐典 (東京大)「新規導入の正イオン質量分析計とシングルステージ加速器質量分析計を組み合わせた第四紀試料の放射性炭素年代測定システムの構築」
- P-17 大下智博・香月興太・瀬戸浩二・辻本 彰 (島根大)・藤木利之 (岡山理科大)・奥野 充 (大阪公立大)・中西利典 (ふじみュー)・山田和芳 (早稲田大)「フィリピンルソン島中央平原のマール湖・パイタン湖の湖底堆積物中の珪藻群集を用いた過去数千年間の古環境復元」
- P-18 鳥江夏希 (島根大)・渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント)・入月俊明 (島根大)・山田 桂 (信州大)・岩谷北斗 (山口大)「花粉分析からみた鮮新—更新世境界付近における古気候変遷」
- P-19 横山佑典 (東京大)・渡辺泰士 (国環研)・平林頌子 (東京大)・尾崎和海 (東科大)・オブラクタ ステューブン (秋田大)「ヒプシサーマルは存在したか？」
- P-20 岡田夏蓮・豊田 新 (岡山理科大)・高田将志 (奈良女子大)「火山灰土に含まれる石英粒子の ESR 信号からみた過去 10 万年間における風送塵堆積環境の変動」

大会案内 (第4報)

- P-21 篠崎鉄哉 (東京大)・土山祐之 (歴博)・笠井克己 (東京大)・井口 亮・西島美由紀 (産総研)・佐野雅規 (歴博)・後藤和久 (東京大)「日本海側地震・津波履歴の解明に向けた地質学的検討：福井県坂井市での例」
- P-22 目代邦康 (東北学院大)・八反地 剛 (筑波大)・小岩直人 (弘前大)・手代木功基・丹羽孝仁・伊藤悟 (金沢大)「令和6年能登半島地震によって発生した内灘砂丘ー河北潟地域の液状化現象の特徴」
- P-23 中西利典 (ふじミュウ)・石山達也 (東京大)・北村晃寿 (静岡大)・堤 浩之 (同志社大)・杉戸信彦 (法政大)・松多信尚 (岡山大)・廣内大助 (信州大)・安江健一・立石 良 (富山大)・荒舘佳子・越後智雄 (環境地質)・ソン キソク (CAL)・ホン ワン (KIGAM)「堆積相解析と放射性炭素年代測定による森本断層の活動履歴の検討」
- P-24 須貝俊彦・館野宏彰・細井星也 (東京大)・丹羽雄一 (慶応大)・杉中佑輔 (計算力学セ)・野口真利江 (首都圏地盤解析ネットワーク)・小宮雪晴・小林美穂 (蓮田市)「埼玉県蓮田市高虫コア HS-TK1 の分析と関東平野中央部の中期更新世後期以降の古地理変遷」
- P-25 石村大輔 (千葉大)・石澤堯史・高橋直也・高橋尚志 (東北大)・渡部真史 (Univ. of Southampton)・山田圭太郎 (山形大)・山田昌樹 (信州大)「礫質堆積物に対する形状 (円磨度) 計測とその応用」
- P-26 里口保文 (琵琶湖博)・加 三千宣 (愛媛大)・山田圭太郎 (山形大)・林 竜馬・芳賀裕樹 (琵琶湖博)「琵琶湖南湖の泥質堆積物の約 5000 年間の堆積速度」
- P-27 渡邊隆広・木田福香 (原子力機構)・山崎慎一 (東北大)・落合伸也・松中哲也 (金沢大)・奈良郁子 (原子力機構)・土屋範芳 (東北大)「湖沼堆積物試料の臭素及びヨウ素分析：WDXRF 法による過去の海水浸入の評価」
- P-28 高原 光・池田りほ・谷田恭子 (京都府立大)「島根県隠岐諸島島後における完新世の植生変遷ー油井の堆積物の花粉分析」

5. シンポジウム・普及講演会「出雲平野と宍道湖の歴史」

主催：日本第四紀学会

共催：島根大学エスチュアリー研究センター・総合博物館

後援：島根考古学会、島根半島・宍道湖中海 (国引き) ジオパーク推進協議会、島根県地学会

日程：2025年8月31日 (日)

会場：島根大学松江キャンパス 大学ホール (松江市西川津町 1060)

※入場無料、事前予約不要

シンポジウム (公開)「後期完新世の気候変動と人間活動との関係をさぐる」

中期完新世の温暖な気候から4,200年前の寒冷イベントを経て、気候変化の大きな後期完新世となります。後期完新世は、縄文から弥生、古墳を経て歴史時代に変遷した時代であり、気候変動や環境変化が人間活動と密接に関係し、大きな影響を受けて文化が移り変わってきた時代でもあります。これらの変動と連関を様々な視点から議論する予定です。

8:30 受付

9:00～12:30 講演

平林頌子・横山祐典 (東京大学大気海洋研究所)「完新世の気候変動と人間社会への影響」

中塚 武 (名古屋大学大学院環境学研究科)「後期完新世の年単位の気候復元から見えてくるもの」

若林邦彦 (同志社大学歴史資料館)「乾燥温暖 / 湿潤寒冷傾向と弥生～古墳時代の文化変化・社会統合」

岩本 崇 (島根大学法文学部)「青銅器サプライチェーンからみた弥生・古墳時代の山陰」

12:15～12:30 総合討論

普及講演会 (公開)「縄文時代から現在に至る出雲平野・宍道湖の移り変わり」

13:00 受付

13:30～15:00 講演

齋藤文紀 (島根大学エスチュアリー研究センター) 「出雲平野のボーリング調査から得られた新知見」
 會下和宏 (島根大学総合博物館) 「宍道湖・中海周辺地域の古環境変遷と遺跡の様相」

6. 企業ブース展示

第四紀学に関連する企業やグループの展示をおこないます。

出展企業：株式会社パレオ・ラボ、株式会社阪神コンサルタンツ、SGS-Beta (日本代理店 株式会社地球科学研究所) (7月15日現在)

7. 専門巡検

すべての巡検は天候等によって変更・中止・延期の可能性があります。実施内容や申込方法の詳細などは、大会専用サイトを通じて最新の情報をお知らせします。

1) 専門巡検 1 「松江周辺の植生」(8月28日) 日本植生史学会との共催

内 容：松江市内、田和山(里山)と枕木山(暖温帯林：針広混交林)の植生見学

案内者：井上雅仁(三瓶自然館)、渡邊正巳(島根大学エスチュアリー研究センター)

日 時：8月28日(木) 9:00～17:00

方 法：レンタカーで移動

行 程：9:00 松江駅集合～田和山の里山～松江駅に帰って各自昼食、13:00 松江駅集合～枕木山～夕刻松江駅解散

定 員：14名(先着順・日本第四紀学会、日本植生史学会会員限定)【受け付け停止】

参加料金：2,000円(レンタカー代、資料代、保険代込)

※昼食は松江駅周辺で各自お取りください。

※水筒やペットボトル飲料の持参、帽子着用などの熱中症対策を各自でお願いします。

※一部、登山道や足場が悪い場所を徒歩で移動します。長袖、長ズボン着用の上、登山靴などでご参加ください。

※集合場所まで、解散場所からの交通費は自己負担となります。

※最小催行人数：5名

2) 専門巡検 2 「大山東麓・南麓のテフラ」(9月1日)

内 容：大山周辺に分布するテフラを見学する。見学する予定のテフラは以下の通りです。

bvs/cpm/dpm1/dvs/dpm2/evs/fpm1/fvs/fpm2/fpm3/gpm/hpm1/hpm2/DBP/DMP/DHP/SK/

DAP1/DAP2/DNP/DSP/DKP/AT/SaA/Od/HgA/HgP/DKg(鏡ヶ成軽石)/Nz1(野添火山灰1)

/Nz2(野添火山灰2)/KiA(キリン火山灰)

案内者：石賀 敏(鳥取地学会)、渡邊正巳(島根大学エスチュアリー研究センター)

日 時：9月1日(月) 8:00～17:00

方 法：レンタカーで移動

行 程：松江駅集合(8:00) — 伯耆町福岡原(DMP) — 江府町笠良原(大山上部火山灰とNzA1/NzA2/KiA) — 蒜山上井川(DOP/DBP/DHP) — 倉吉市大山池(大山最下部火山灰～大山上部火山灰) — 倉吉市般若西(大山最下部火山灰と大山上部火山灰) — 米子空港 — 松江駅解散 予定(17:00)

※天候等によってルートや行程は変更になる可能性があります。

定 員：15名(先着順・会員限定)【受け付け停止】

参加料金：3,000円(レンタカー代、資料代、保険代込)

※昼食は各自事前にご準備ください。

※水筒やペットボトル飲料の持参、帽子着用などの熱中症対策を各自でお願いします。

※集合場所まで、解散場所からの交通費は自己負担となります。

※最小催行人数：5名

3) 専門巡検3「三瓶小豆原埋没林とたたら」(9月1日)

内容：三瓶山の4000年前の噴火によって埋没し、地底に保存された縄文の森ミュージアム、たたら製鉄のための鉄穴流しやそれによって形成された棚田や残丘地形を概観します。

案内者：中村唯史(三瓶自然館)、齋藤文紀(島根大学)

日時：9月1日(月) 8:00～17:00

方法：中型バスで移動

行程：8:00 松江駅発、大田市さんべ縄文の森ミュージアム(三瓶小豆原埋没林)、奥出雲町の福頼棚田展望台、羽内谷鉾山鉄穴流し本場、安来市和鋼博物館を經由して松江駅着 17:00

定員：最大25名(先着順・会員限定)【受け付け停止】

参加料金：6,000円(バス代、ミュージアム・博物館入館料、保険代込)

※昼食は各自事前にご準備ください。

※水筒やペットボトル飲料の持参、帽子着用などの熱中症対策を各自でお願いします。

※集合場所まで、解散場所からの交通費は自己負担となります。

※最小催行人数：10名

8. 大会に参加する方への注意事項

1) 来場方法

公共交通機関をご利用ください。

https://www.shimane-u.ac.jp/nyushi/transport_access/campus_map/campus_map01.html

＊松江市営バス

・北循環線内回り 島根大学前下車・・・所要時間約15分

・島根大学・川津行 島根大学前下車・・・所要時間約20分

※他に「東高校」もあります。

＊一畑(いちばた)バス

・美保関(みほのせき)ターミナル行 島根大学前下車・・・所要時間約20分

2) 昼食は各自でご準備ください。学内には食堂(日曜は休業)、大学前にはコンビニなどがあります。近隣にもわずかですが飲食店はあります。

3) 懇親会(8月30日 18:00～20:00)

第二食堂 ニコラ2階にて実施します。事前予約(大会専用サイトにて、8月22日まで申込可)をお願いいたします。料金は6,000円となります。多くの方のご参加をお待ちしております。

9. 大会実行委員会および行事委員会

大会実行委員長：齋藤文紀(島根大)

実行委員：瀬戸浩二、香月興太、入月俊明、酒井哲弥、渡邊正巳(島根大)、中村唯史、井上雅仁(三瓶自然館)、石賀 敏(鳥取地学会)

行事委員会：池原 実(高知大・行事委員長)、宍倉正展(産総研)、西澤文勝(生命の星・地球博)、林竜馬(琵琶湖博) 小荒井 衛(茨城大)

連絡先：2025年大会実行委員会事務局

〒690-8504 松江西市西川津町1060 島根大学エスチュアリー研究センター 齋藤文紀

Tel.: 0852-32-6037

eメール：ysaito(at)soc.shimane-u.ac.jp((at)を@に変える)

◆日本第四紀学会 2025 年度総会・第 2 回評議員会のお知らせと委任状提出のお願い

日本第四紀学会 2025 年度総会は、2025 年大会期間中の 8 月 30 日（土）16:00～17:30（予定）に大会会場の島根大学松江キャンパスでの対面と Zoom を用いたオンラインによるハイブリッド形式で開催します。総会は 2024 年度の事業報告が行われ、また 2025 年度事業計画が提案される重要な会議です。会員の皆様には、ぜひともご参加をお願いします。大会への参加登録がまだの方は、大会専用サイト (<https://sites.google.com/view/2025jaqua/>) から申し込んでください。また、総会に参加されない正会員の方は、同じく大会専用サイトから総会委任状の提出をお願いします。委任する場合は、総会議長または総会に出席される正会員へ委任してください。なお、総会議長への委任を除き、個人の正会員へ委任される場合には、出席される正会員 1 名につき、欠席される正会員 1 名分しか委任を受けることができません。事前に委任者にご確認ください。参加登録及び委任状提出の締め切りは 8 月 22 日（金）17 時です。総会に引き続いて、2025 年日本第四紀学会学会賞・学術賞、若手学術賞、論文賞・奨励賞受賞者の表彰式を行います。こちらへのご参加もお願いします。

総会資料は、8 月 29 日（金）までに、会員マイページ（学会ウェブサイトトップページ右横のバナーからアクセス可能）に掲載予定です。会員マイページへは、会員番号（会誌が入った封筒の会員宛名の下にある 10 桁の数字）とパスワードが必要です。総会当日は紙媒体での資料配布はいたしません。

2025 年度第 2 回評議員会は、大会初日の 8 月 28 日（木）15:00～18:00（予定）に大会会場の島根大学松江キャンパスでの対面と Zoom を用いたオンラインによるハイブリッド形式で開催します。2025 年度評議員には 8 月中旬に評議員会メーリングリストにて詳細を連絡いたします。なお、本評議員会に参加を希望する会長経験者の方は 8 月 22 日（金）17 時まで庶務委員会 ([shomu\(at\)quaternary.jp](mailto:shomu(at)quaternary.jp) [(at) の部分を @ に変える]) までご連絡ください。

◆日本第四紀学会 学会賞選考委員会報告

2025 年 6 月 15 日
学会賞選考委員会 委員長 鈴木毅彦

日本第四紀学会 2025 年学会賞等の候補者の推薦は 2025 年 2 月 28 日をもって締め切られた。学会賞選考委員会（鈴木毅彦委員長、百原 新副委員長、齋藤文紀委員、久保純子委員、三田村宗樹委員）は、2025 年 4 月 12 日、4 月 28 日、5 月 24 日にオンライン会議を開催し、推薦のあった日本第四紀学会学術賞 3 名、同若手学術賞 1 名について 2025 年受賞候補者の選考を行った。選考委員会会議においては、被推薦者の資格を確認した。また、委員の利益相反の確認を行った。日本第四紀学会顕彰規程と関連する内規に基づき、推薦書、被推薦者の業績等を参照して審議した結果、学術賞 3 名、若手学術賞 1 名の受賞候補者を決定した。

●日本第四紀学会学術賞候補者

氏 名（所属）：苅谷愛彦（専修大学文学部）

件 名：日本アルプスを中心とする高山地域における地形形成過程に関する一連の研究 (Studies on geomorphological processes in and around the Japanese Alps)

選考理由：

苅谷愛彦会員は日本列島の山岳地域およびペルーアンデスなどの高山地域において、最終間氷期以降の氷河作用・周氷河作用・地すべり作用などの地表プロセスと斜面地形の形成や、地形と植生のかかわりに

ついでの研究を推進してきた。近年はとくに日本アルプス高山地域の地すべりプロセスに関する研究に取り組んでいる。

苜谷会員は高山地域においてフィールドワークを続け、大起伏山地源流部の谷壁や谷底部に見られる不淘汰礫質堆積物の堆積相の丹念な記載とともに、 ^{14}C 年代法に加えてテフクロノロジーや宇宙線生成核種年代測定法、樹木年輪の酸素同位体比年代法などを駆使し、高山域の地形形成プロセスと年代を詳細に検討し、後期更新世から完新世における環境変遷史の解明を進めてきた。それらのデータから、これまで氷河地形として認識されてきた対象地域における地形形成プロセスの多くが地すべりによるものと考えられることを指摘した。

例えば、飛騨山脈の白馬岳北股入流域においては堆積物中の木片や腐植物の年代を測定し、後期更新世のモレーンとされたものが主に完新世の地すべり移動体の可能性があることを指摘した。これは従来のこの地域の地形発達史や地形年代観の大幅な修正を求めるものである。また、同山脈の針ノ木岳や水晶岳、蝶ヶ岳などでは大規模地すべりや土石流の発生時期を明らかにした。さらに、赤石山脈の仙丈ヶ岳藪沢では、これまで氷河性堆積物とされてきた礫質堆積物が特徴的な変形破碎構造を持ち、その年代値からも、完新世初頭の大規模地すべりによることを明らかにした。

また、長野県梓川上流において、大規模地すべり地形や土石流ロープ、沖積錐などの地形形成と植生分布構造の関係を明らかにするなど、植生史分野の研究でも成果を上げている。このほか海外においても、ペルーアンデスにおける大規模地すべり地形の分布を明らかにし、現地の人々の生活や文化との関わりも議論している。

苜谷会員の研究は地形学や層序学だけではなく、生態系、グローバルな気候変動やテクトニクス、斜面災害や生活文化など多岐にわたり、数多くの論文を国際学術雑誌などで国内外へ発信している。

以上のように、苜谷愛彦会員は優れた研究業績をあげ、第四紀学の発展に大きく貢献していることから、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会学術賞候補者

氏名(所属)：里口保文(滋賀県立琵琶湖博物館)

件名：日本列島における後期鮮新世～中期更新世広域火山灰の層序確立に関する一連の研究 (Studies on the establishment of the stratigraphy of widespread tephra from the Late Pliocene to the Middle Pleistocene in the Japanese Islands)

選考理由：

プレート境界に隣接する日本列島には、激しい地殻変動を反映して山地とそこに分布する大小様々な堆積盆が発達する。日本列島における第四紀テクトニクスを解明する上で、各堆積盆での層序確立と堆積盆間での堆積史比較は不可欠である。こうした研究を進めていく上で広域に分布する後期鮮新世～中期更新世テフラを用いることは非常に有効である。

このような日本の第四紀研究の特性を背景に、里口保文会員は、長年にわたり房総半島の上総層群・三浦層群、静岡県掛川層群、伊勢湾周辺地域の東海層群、古琵琶湖層群、大阪層群に含まれるテフラに着目し、フィールドワークと室内分析からなる研究を進めてきた。初期の研究では、各堆積盆において多数のテフラの記載岩石学的なデータを整備し、得られたデータをもとにテフラをテフロゾーンに区分し、また火山噴火活動の変遷を論じた。続く研究では、同一のテフラを異なる堆積盆に追跡し、後期鮮新世～中期更新世の広域テフラの研究を大きく前進させた。その代表例として、東海層群の大田テフラ層、東海層群の佐布里火山灰層、大阪層群の土生滝1火山灰層、大阪層群の福田火山灰層(上総層群のKd38)、掛川層群の上土方1火山灰層(上総層群のKd25)などが挙げられ、それまであまり注目されていなかった第四紀以前を含めた約4～1 Maに噴出年代をもつ広域テフラに対して多くの重要な知見を得た。これらの成果は、他の研究者によるテフラ層序、古地磁気層序、生層序等の研究成果を総合的に取り入れ、本州中央部における約5 Ma以降の鮮新・更新統に関する総合編年としてまとめられ、数多く研究論文で引用されている。

里口保文会員の連続的研究成果は、火山灰層序だけではなく、共同研究を通じて古地磁気、古植生、微化石、古海洋に関する研究への応用に繋がっており、第四紀学に顕著な貢献を果たしている。それらは多

くの国際誌に掲載されてきている。また所属博物館の学芸員として、琵琶湖をテーマに地域の第四紀学に関わる教育普及活動を実施し、一般の人々の第四紀に関する関心を高めてきた。

以上のように、里口保文会員の業績は優れており、第四紀学の発展に大きく貢献していることから、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会学術賞候補者

氏名(所属)：植村 立 (名古屋大学大学院環境学研究科)

件名：アイスコアや鍾乳石の安定同位体比を用いた過去の気候変動の研究 (Studies on past climate changes using the stable isotope ratios of ice cores and speleothems)

選考理由：

植村 立会員は、軽元素の安定同位体比を用いて第四紀の気候および環境変動を解明する研究において、顕著な業績を挙げてきた。とくに、氷床コアや鍾乳石といった古気候アーカイブを対象に、同位体分析手法の開発、現地観測、室内実験を有機的に組み合わせた独創的なアプローチによって、先導的な研究を展開している。

代表的な成果として、国立極地研究所が主導したドームふじアイスコア計画において同位体分析を担当し、過去 72 万年間の南極の気温および海水温を復元した研究が挙げられる。本研究では、大気中の二酸化炭素濃度変動が南大洋の海水温と高い相関を示すこと、また二酸化炭素濃度と南極気温変動との不一致が、地軸傾斜に伴う南極の地域的な日射量変動によって説明可能であることを示した。

アイスコアの同位体比解析には、降雪の起源となった水蒸気が発生した海域の水温変動を考慮する必要がある。植村会員はこの課題に対し、南太平洋上において大気中水蒸気の酸素および水素同位体比の観測を実施し、これらを組み合わせた *d-excess* が海面水温および相対湿度の指標となることを世界で初めて実証した。さらに、2010 年当時新興の研究対象であった酸素 17 (^{17}O) 同位体においても、海洋上水蒸気の ^{17}O 過剰が相対湿度の指標となることを明らかにし、古気候研究の基盤を形成する重要な知見を提供した。加えて、南極アイスコア中の硫黄同位体比分析を通じて、硫酸エアロゾルの起源に関する新たな知見を得た。現在は海洋生物活動由来の硫酸エアロゾルが支配的であるのに対し、最終氷期には陸域起源のエアロゾルが増加していたことを示し、その発生源として南米アタカマ砂漠を提唱した。また鍾乳石を用いた研究では、流体包有物中の水の同位体比に着目し、炭酸カルシウムの酸素同位体比との併用による新手法を開発し、沖縄における最終氷期の気温を定量的に復元することに成功した。

これら一連の研究成果は、第四紀の気候および環境変動の定量的復元に大きく寄与し、第四紀学の発展に重要な貢献を果たしている。IPCC 報告書にも引用されるなど、国際的にも高い評価を受けている。

以上の理由により、植村 立会員はその優れた学術的貢献により、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会若手学術賞候補者

氏名(所属)：石井祐次 (産業技術総合研究所地質調査総合センター)

対象論文 1： Ishii, Y. (2024) IRSL and post-IR IRSL dating of multi-grains, single grains, and cobble surfaces to constrain fluvial responses to climate changes during the last glacial period in the Tokachi Plain, northern Japan. *Quaternary Geochronology*, 79, 101486. <https://doi.org/10.1016/j.quageo.2023.101486>.

対象論文 2： Ishii, Y. and Ito, K. (2024) Luminescence dating of sand matrices within gravelly fluvial deposits: Assessing the plausibility of beta dose rate calculation. *Quaternary Science Advances*, 13, 100160. <https://doi.org/10.1016/j.qsa.2023.100160>.

選考理由：

石井祐次会員は、河川の中流～下流域での河成段丘堆積物の分析、ルミネッセンス年代測定を通じて、河川による地形発達過程に関わる調査研究を進めてきた。対象論文は、北海道十勝平野の河成段丘堆積物を研究対象とした 2 編の論文である。

対象論文1は、後期更新世の河成段丘堆積物を対象として、長石砂粒と花崗岩礫表面の長石粒を用いて、ルミネッセンス信号の計測を多角的に行い、それらの比較検討から信頼できる年代を示した。得られた河成段丘堆積物の年代値から、十勝平野のこの地域では、後期更新世に生じた河成平野の土砂の上方付加と下刻が東アジアモンスーンによる降水量変動と関連している可能性を示した。さらに、今回試みたルミネッセンス信号の計測・比較検討手法は光ルミネッセンス年代測定の高精度化をもたらす手法として注目される。

対象論文2は、河川堆積物でのルミネッセンス年代測定において、粒度による β 線量率の変動が大きいこと、定型的に活用できる線量率推定法がないことが課題となっていることに着目した。本論文では、北海道十勝平野の河成段丘堆積物における礫層基質と砂層に含まれる長石砂粒について比較検討を行った。粒状材料の平均 β 線量率評価モデルから礫質堆積物の砂サイズにみあう修正モデルを提示・適用し、従来の方法よりも高い確度で β 線量率が得られることを示し、ルミネッセンス年代測定の高精度化につながる結果を示した。

石井祐次会員の2編の論文は、年代評価の難しい第四紀後半の河川堆積物でのルミネッセンス年代測定を向上させる手法の提示と適用例を示したものであり、第四紀学の発展に寄与する成果と認められることから、若手学術賞にふさわしいと判断した。

◆日本第四紀学会 論文賞選考委員会報告

2025年6月15日

論文賞選考委員会 委員長 前杵英明

日本第四紀学会2025年論文賞・奨励賞候補者の推薦は2025年2月28日をもって締め切られた。その結果、論文賞、奨励賞として推薦された論文はなかった。論文賞選考委員会（前杵英明委員長、奥野淳一委員、菅沼悠介委員、吾妻 崇委員、齋藤めぐみ委員）は、3月6日にメール審議にて第1回選考委員会を開き、受賞の対象となる第四紀研究第62巻第1号から第63巻第4号に公表された論文のうち、奨励賞候補の審査対象論文が3編あること、論文賞候補の審査対象論文が、奨励賞候補の3編の他に26編あることを確認した。そして5月8日までの間に対象論文を精査し、奨励賞・論文賞にふさわしい論文を5段階で評価し点数化することで合意した。なお、審査員が関わっている論文は評価対象としないことを確認した。5月上旬に各委員から送付された点数表を委員長がまとめ、平均点が高い論文を抽出した。その結果、論文賞候補2編、奨励賞候補2編を原案として5月22日に各委員に送付し、メール審議にて第2回選考委員会で合意が得られたので、下記論文を論文賞および奨励賞候補として委員会から推薦することを決定した。

●論文賞

氏名：林 竜馬会員

論文：論説 滋賀県の遺跡花粉データベースからみる地域・局所スケールの植生変遷史
第四紀研究, 第63巻第1号, 3-17頁。

選考理由：

本論文は、滋賀県における考古遺跡調査から得られた花粉分析データを活用し、局地的スケールのみならず地域的スケールにおいても過去の植生変遷を明らかにしたものである。特に、遺跡ごとの個別的な植生景観の復元と、それらを統合することで得られる俯瞰的な視点の両面から検討を行い、空間スケールを変えた植生復元の方法論的可能性を示した点は高く評価される。

本論文では、滋賀県南部における縄文時代早期から中世に至るまでの多数の遺跡花粉分析結果を収集・

平均化することにより、当該地域の植生景観の変遷を示すとともに、その結果が琵琶湖およびその周辺湿原における既存の花粉分析結果と整合することを示した。逆に、局所的な差異も明確に可視化し、たとえば飛鳥～奈良時代における丘陵地と平野部の植生景観の違いに関する新たな知見を提示している。

使用されたデータベースは、滋賀県南部の低地を中心に調査された 60 遺跡 891 層準に及ぶ花粉データを、著者らが丹念に集成したものであり、2017 年に公益財団法人滋賀県文化財保護協会紀要に公表されている。遺跡分布や調査状況に伴う地理的偏りという課題を抱えつつも、2013 年度までの調査成果を網羅的に集約し、標準化されていない多様な報告書から一貫したデータを抽出・整理したものである。本論文は、このデータベースに収集されたデータを活用し、著者が目指す森と人との相互関係史の実証的な解明を試みている。

このように、本論文は遺跡花粉データベースの実用性を確かめるとともに、今後のデータ更新・蓄積によるデータベースの質的向上への道筋を示しており、第四紀学における実証的研究の模範となるものである。

以上より、本論文は第四紀学の発展に大きく寄与すると期待されるため、本論文の著者である林 竜馬会員を論文賞の受賞者に推薦する。

●論文賞

氏名：小松原 琢会員・本郷美佐緒会員・古澤 明（非会員）

論文：論説 北上山地北部・外山川上流部（大石川）の最終氷期前期堆積段丘
第四紀研究，第 63 巻第 2 号，127–146 頁。

選考理由：

段丘地形の研究は、第四紀における地形発達史や気候変動を理解する上で重要な知見を提供するが、その堆積・形成過程の復元には、層相解析に加えて精度の高い年代および環境指標が求められる。本論文は、北上山地北部・外山川上流部（大石川）に発達する最終間氷期後期～最終氷期前期の堆積段丘を対象に、詳細な露頭観察と多面的な分析を通じて、その形成過程と環境変化を明らかにしたものである。

本研究では、放射性炭素年代に加えて、段丘堆積物中の火山灰について主成分・微量成分の化学組成に基づき十和田大不動テフラ（To-Of）と対比し、これを鍵層として編年を確立している。さらに、複数層準での花粉分析により、当時の植生と気候環境、ならびに湿地的条件の成立とその変遷も復元している。砂礫層から粘土層への遷移とそれに伴う花粉組成の変化は、気候の寒冷化と湿原化の進行を示しており、段丘堆積物の時空間的背景を具体的に描き出している点が評価される。

従来、北上山地の段丘研究では環境変遷の復元が限定的であったが、本論文はその課題に対し、露頭の詳細な記載を起点に、信頼性の高い環境復元を実現した。また、花粉やテフラといった異なる指標の統合的な分析により、段丘形成と気候・植生変化の連関を丁寧に読み解いており、第四紀地形研究に対して新たな視点を提供している。

以上より、本論文は第四紀学の発展に大きく寄与すると期待されるため、本論文の著者 3 名を本学会の論文賞に推薦する。

●奨励賞

氏名：廣瀬允人会員

論文：論説 岐阜県九合洞窟遺跡より出土した縄文時代草創期終末の動物遺存体（英文）
第四紀研究，第 63 巻第 3 号，183–200 頁。

選考理由：

本論文は、名古屋大学博物館に保管されていた岐阜県九合洞窟遺跡出土の動物遺存体について、著者による動物考古学的な検討を通じて再評価を試みたものである。九合洞窟遺跡は 1950 年に発掘調査が行われていたものの、出土した動物遺存体に関する詳細な分析は長らく未実施のままであった。本研究は、そうした未検討資料に光を当てた意義深い試みであり、中部日本における縄文時代草創期終末の動物利用に関する貴重な知見を提供している。

本論文では、攪乱のない層準から出土した 2 点のシカ骨に対して放射性炭素年代測定を行い、動物遺存

体群集が更新世末期から完新世最初期頃、すなわち縄文草創期終末に属することを実証した。検討された動物遺存体群は、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、貝類に及び、特にニホンジカとイノシシが主要な狩猟対象であったことが数量的に示された。また、ニホンザルやツキノワグマ、カモシカの利用も推定され、当時の狩猟活動の多様性が示唆された。

さらに、イノシシの下顎骨における歯の萌出段階から、狩猟活動が冬季に行われた可能性が指摘され、また、ニホンジカの体サイズが後続時代に比べて大きかったことも明らかにされるなど、縄文人の生業や陸上哺乳類の体サイズの経時的変化にも言及した。これらの成果は、縄文時代草創期における人間の生活様式や当時の動物相に関する新たな知見を提供するものであり、学術的価値は高い。

本研究は、第四紀学および動物考古学の発展に資する意義深い成果を挙げている。今後のさらなる研究の展開も大いに期待されることから、本論文の著者である廣瀬允人会員を奨励賞の受賞者に推薦する。

●奨励賞

氏名：須賀永帰会員

論文：総説 打製石器の石材における剥離予測性：岩石の表面あるいは内部の構造の把握と力学的特性の測定による検証方法のレビュー

第四紀研究, 第63巻第4号, 215-228頁。

選考理由：

本論文は、先史時代における打製石器製作の根幹をなす「石材の剥離しやすさ」に着目し、従来「質」として曖昧に用いられてきた概念を、「剥離予測性」という理論的かつ定量的な枠組みとして再定義した点に大きな意義がある。さらに、この概念を力学および構造的アプローチの両面から整理し、各手法のメリットと限界を明示することで、今後の研究の方向性を具体的に示しており、学術的貢献は極めて大きい。以上の点から、本論文は日本第四紀学会論文奨励賞にふさわしい優れた総説論文であると言える。

特筆すべきは、破壊力学・材料工学・地質学といった異分野の知見を積極的に取り入れ、石器考古学における評価手法を拡張した学際的アプローチである。「力学的アプローチ」と「構造的アプローチ」に分類された先行研究の体系的な整理は、現時点で得られている知見の全体像を明示するとともに、今後の石材研究における標準的な分析枠組みの基盤として広く活用される可能性を有している。

また、文化財資料としての石器に対する配慮として、非破壊分析の有効性や、実験考古学的手法を通じた検証の必要性にも言及されており、実践的な応用研究への展望も開かれている。加えて、定量的指標に基づく考察は、他の石器研究や数理モデルとの連携可能性を高めるものであり、石器研究全体の汎用性と発展性を示す重要な一歩である。

本研究は、従来定性的に論じられてきた石器石材の評価に、定量性と再現性を付与する新たな研究指針を提示しており、その独創性、論理性、および学際的発展性において顕著な学術的貢献をなしている。今後のさらなる研究の展開も大いに期待されることから、本論文の著者である須賀永帰会員を奨励賞の受賞者に推薦する。

◆日本第四紀学会 2024 年度第 5 回評議員会議事録

日時：2025年6月15日（日）9:00～11:10

方法：Zoom システムを用いたオンライン開催

出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、
須貝俊彦（副会長）、<以下、評議員>

水野清秀（議長）、井上 淳（副議長）、
青木かおり、吾妻 崇、池原 実、石原
与四郎、奥村晃史、加 三千宣、久保純子、

佐藤善輝、白井正明、里口保文、中塚 武、
平林頌子、堀 和明、三田村宗樹、山田
和芳 以上 20 名

委任状：議長委任 14 通

オブザーバー参加：齋藤咲良（事務局：春恒社）

水野清秀議長の司会によって開会され、鈴木毅

彦会長の冒頭挨拶の後、定足数確認によって評議員会が成立していることを確認した。以降は水野議長によって議事が進められた。最後に北村晃寿、須貝俊彦両副会長の挨拶で閉会となった。

1. 報告事項

(1) 2025-2026 年度役員選挙結果報告

山田和芳庶務委員長によって役員選挙結果が紹介されるとともに、当選者には委嘱状を送付したこと、6月16日17時30分からオンラインによる当選者会議が開催されることが報告された。

(2) 評議員辞退者の件

山田和芳庶務委員長によって、2025-2026 年度評議員に当選された石村大輔、米田 稔両会員から、やむを得ない事情により辞退の申し入れがあり、これについて会長了承としたことが報告された。今後、会則に基づき 2025 年度第 1 回評議員会にて欠員補充をおこなうプロセスについて確認して、2025 年度評議員会への申し送り事項とすることとした。

2. 審議事項

(1) 2025 年日本第四紀学会学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者の決定

鈴木毅彦学会賞選考委員長から学会賞・学術賞・若手学術賞候補者それぞれについて選考経過と候補者の推薦理由について説明があった。候補者及び利益相反の関係にある評議員の退席の上で審議の結果、賛成多数にて下記のとおり、全候補者が受賞者としてそれぞれ確定した。

学会賞受賞者：該当なし

学術賞受賞者：苅谷愛彦会員、里口保文会員、植村 立会員

若手学術賞受賞者：石井祐次会員

(2) 2025 年日本第四紀学会論文賞・奨励賞受賞者の決定

前杵英明論文賞選考委員長の代理として山田庶務委員長から論文賞・奨励賞それぞれについて選考経過と候補論文の推薦理由について説明があり、さらに吾妻 崇選考委員から補足説明があった。出席評議員の中には利益相反の関係にある評議員がいないことを確認した上で審議した結果、賛成多数にて下記のとおり、全候補者が受賞者としてそれぞれ確定した。

論文賞受賞者：林 竜馬会員

受賞論文：論説 林 竜馬 (2024) 滋賀県の遺跡花粉データベースからみる地域・局所スケー

ルの植生変遷史. 第四紀研究第 63 巻第 1 号, 3-17 頁.

論文賞受賞者：小松原 琢 会員・本郷美佐緒 会員・古澤 明 (非会員)

受賞論文：論説 小松原 琢・本郷美佐緒・古澤 明 (2024) 北上山地北部・外山川上流部 (大石川) の最終氷期前期堆積段丘. 第四紀研究, 第 63 巻第 2 号, 127-146 頁.

奨励賞受賞者：廣瀬允人会員

受賞論文：論説 廣瀬允人 (2024) 岐阜県九合洞窟遺跡より出土した縄文時代草創期終末の動物遺存体 (英文). 第四紀研究, 第 63 巻第 3 号, 183-200 頁.

奨励賞受賞者：須賀永帰会員

受賞論文：総説 須賀永帰 (2024) 打製石器の石材における剥離予測性：岩石の表面あるいは内部の構造の把握と力学的特性の測定による検証方法のレビュー. 第四紀研究, 第 63 巻第 4 号, 215-228 頁.

(3) 日本第四紀学会特別委員会オンライン委員会の 2025-2026 年度継続提案

山田和芳庶務委員長から、2021 年度より特別委員会として設置されているオンライン委員会の 2025-2026 年度も継続設置するための改正案が提案され、審議の結果承認された。なお、今後のオンライン委員会の在り方については、Zoom や peatix でのセキュリティ強化についての対応を含めながら執行部会で検討することも報告された。

改正部分 (抜粋)

日本第四紀学会 オンライン委員会内規

[期間]

2. 本委員会の設置期間は、2023 2025 年 7 月 1 日から 2025 2027 年 6 月 30 日までとする。また、委員の任期も同じとする。

3. 意見交換

(1) 学会設立 70 周年記念大会 (つくば 2026 大会) について

鈴木毅彦学会設立 70 周年記念事業委員長から、2026 年 8 月 20 日 (木) ~ 22 日 (土) に茨城県つくば市の産業技術総合研究所にて開催予定の学会設立 70 周年記念大会の準備状況にて報告があった。さらに、記念大会のコンテンツについて意見交換をおこなった。領域ごとのレビューを中心としたシンポジウム (口頭発表)、海外研究者などを招聘した特別講演会、一般講演のポスター発表などの執行部会の企画案が紹介された。評議員から

は50周年記念大会の状況などが共有された。地質標本館での企画展や、産総研担当者などの共有がなされた。引き続き次期執行部会にて検討を進めていくことが確認された。

(2) 2025-2026年度体制への引継ぎ

北村晃寿次期会長から、次年度体制への引継ぎ状況やプロセスについて説明があった。とくに、2025年島根大会から導入する非会員による発表や、大会参加費についての情報共有があった。

(3) JpGU-AGU Joint Meeting 2026について

白井正明渉外委員長から、次年度のJpGU-AGU

ジョイント大会の方針、とくに発表言語の英語必須化についての対応が必要であることが報告された。評議員からは今回の方針に至ったJpGU内でのこれまでの議論内容、過年度のセッション状況についての情報共有がなされた。引き続き次期執行部会にて検討を進めていくことが確認された。

(4) 会費滞納者について

山田和芳庶務委員長から会費滞納者についての情報共有がなされた。

以上

◆日本第四紀学会 2024年度第5回執行部会議事録

日時：2025年5月31日（土）9:00～11:50

方法：Zoomシステムを用いたオンライン開催

出席者：鈴木毅彦（会長）、須貝俊彦（副会長）、北村晃寿（副会長）、山田和芳（庶務委員長）、堀和明（会計委員長）、荻谷愛彦（編集委員長）、白井正明（渉外委員長）、池原実（行事委員長）、横山祐典（領域1代表）、吾妻崇（領域2代表）、里口保文（領域3代表）、小荒井衛（領域5代表）
欠席者：那須浩郎（広報委員長）、海部陽介（領域4代表）

オブザーバー参加：高橋尚志（選挙管理委員長）、齋藤咲良（事務局：春恒社）

鈴木毅彦会長の挨拶によって開会され、北村晃寿副会長の司会進行のもと、下記のとおり議事進行が進んだ、最後に須貝俊彦副会長の挨拶によって閉会した。

主な報告事項

- (1) 2025-2026年度役員選挙結果について選挙管理委員会から報告を受けた。
- (2) 転載許可1件、後援1件をおこなった。
- (3) 2025-2026年度役員選挙による役員（会長、副会長、評議員）に対して当選通知を発送した。
- (4) 杉村新名誉会員の逝去に際し、弔電・生花を送り、紙碑依頼者を決定した。
- (5) 第四紀研究第64巻第1号、第2号を発行して会員に配付した。また関連する掲載論文のJ-STAGE早期公開に対応した。

(6) 編集委員会を4回開催し、論文の採択等を審議した。

(7) 2つの特集号（居家以岩陰遺跡、東北地方自然環境）の受理審議・編集等を進めた。

(8) 2025年5月21日現在の編集状況は、通常号は受理前12編、受理済み2編である。

(9) 第四紀通信第32巻第1号（2025年2月号）及び第2号（2025年5月号）を編集して発行した。

(10) 2025年大会（松江）の第3報をとりまとめて、第四紀通信第32巻第2号に掲載した。大会専用サイトを公開して、会員MLへの周知とともに、学会ウェブサイトからリンク設定をおこなった。

(11) 2025年大会（松江）におけるシンポジウム（公開）・普及講演会（公開）の全体テーマ、タイトル、講演プログラムが報告された。

(12) 日本地球惑星科学連合（JpGU）2025大会について、学会が主（共）催したセッション報告があった。また、学協会インフォメーションコーナーにて配架したリーフレット「第四紀とは」はすべて配布された。

(13) JpGU学協会長会議（5月28日開催）やJpGU学協会長会議幹事会（第1回2月17日、第2回4月17日）が開催され、いずれも鈴木毅彦会長が出席した。

(14) 学会として加盟している防災学術連携体関係として、4月30日（水）に開催されたシンポジウム「防災庁への期待」にて、吾妻崇会員が「第四紀学から防災行政への期待と貢献」というタイトルで講演をおこなった。

(15) 領域1活動として、JpGU2025大会にて人新世・第四紀の気候および水循環セッションを開催した。

(16) 領域1活動として、シドニー大学のJody Webster教授の特別講演会(The response of coral reef systems to sea level rise: how/why do reefs drown?)を5月23日に東京大学大気海洋研究所にて実施した。

(17) 領域3活動として、広報委員会とともに、学会ウェブサイトにおいて「日本の第四系」の 카테고리を立ち上げ、「玄武洞」記事(兵頭会員執筆)を掲載した。今後、チバニアンGSSPや水月湖を予定している。

(18) 学会設立70周年にあたる2027年大会について、大会会場の手続きが終えた。今後、内容について検討をおこなう。

(19) 学会設立70周年記念事業に関して出版する一般書籍本について、5月20日に出版社とともに編集幹事会を開催して、原稿提出状況および今後の進め方について確認した。すべての原稿が提出されており、目次構成の調整をおこなった。また、書名は「図説 日本列島の歴史：第四紀の人と環境(仮)」となった。今後のスケジュールについておおむね当初の計画通りに進んでいることが報告された。

(20) 学会賞選考委員会から6月15日評議員会にて審議する2025年学会賞・学術賞・若手学術賞に関する委員会報告内容について確認して、執行部会及び受賞対象者に対して文言チェックと依頼することとした。

(21) 論文賞選考委員会の審査状況について報告がなされた。

主な審議事項

(1) 2025-2026年度役員選挙結果の公開内容についての方針を承認した。また、選挙管理委員会からの答申を含め、役員選挙に関する懸念事項について整理して、今後検討を進めることとした。

(2) 特別委員会オンライン委員会について2025-2026年度も設置継続することを承認して、次回評議員会にて審議することとした。

(3) 2024年度の会計報告や会計監査の進め方について確認して、準備を進めることが承認された。

(4) 投稿規定の表記について、過去の経緯や関係者に確認した上で、現状のままとすることが承認された。

(5) 編集書記の処遇改善に向けて、契約の確認、引き上げ額の検討を行うこととした。

(6) 非会員学生の学会大会発表に関連する大会実行委員会からの申し入れについて審議した。その結果、現行の大会運営規定で対応が可能であることを確認した上で、共同発表者に会員がいる場合は、非会員学生の発表を可とすることが承認された。それに合わせて、参加費や発表時のロゴ使用について審議の上、行事委員会提案が一部修正の上で承認された。承認事項については速やかに大会専用サイトに反映することとした。なお、今後大会運営規程の改定もおこなうことも視野に置いて、2025年大会(松江)の状況を参考にして継続検討することとした。

(7) 日本地球惑星科学連合(JpGU)2026大会の英語発表義務化の方針について、学会セッションの取扱いについて懇談した。今後も継続検討することとした。

(8) 2025年度執行部会への引継ぎをおこなうべく、各委員会、領域に対して引継内容を整理する依頼があり、対応することとした。

以上

日本第四紀学会 2025～2026年度役員名簿 (2025年7月1日～2027年6月30日)

執行部会

会長 北村晃寿

副会長 藤原 治、横山祐典

領域代表 加 三千宣(領域1)、奥野 充(領域2)、長橋良隆(領域3)、中塚 武(領域4)、三田村 宗樹(領域5)

常設委員会委員長 齋藤めぐみ(庶務)、納谷友規(会計)、石原与四郎(編集)、目代邦康(広報)、池原 実(行事)、白井正明(渉外)

評議員

領域 1

領域代表：加 三千宣、領域幹事：阿部彩子、池原 実、久保田好美、田村 亨

領域 2

領域代表：奥野 充、領域幹事：吾妻 崇、苅谷愛彦、久保純子、小松原純子、宍倉正展、白井正明、須貝俊彦、堀 和明

領域 3

領域代表：長橋良隆、領域幹事：青木かおり、里口保文、菅沼悠介、塚本すみ子、納谷友規

領域 4

領域代表：中塚 武、領域幹事：出穂雅実、海部陽介、齋藤めぐみ、那須浩郎、林 竜馬、百原 新、森先一貴

領域 5

領域代表：三田村宗樹、領域幹事：石原与四郎、植木岳雪、目代邦康、山田和芳

委員会

庶務委員会

齋藤めぐみ（委員長）、オブラクタ・スティーブン、吾妻 崇、水野清秀、山田和芳

会計委員会

納谷友規（委員長）、平林頌子、堀 和明、海部陽介、植木岳雪

編集委員会

石原与四郎（委員長）、坂下 渉、後藤秀昭、小松原純子、青木かおり、宮入陽介、井上 淳、岩瀬 彬、小森次郎

行事委員会

池原 実（委員長）、宍倉正展、西澤文勝、林 竜馬、小荒井 衛

広報委員会

目代邦康（委員長）、田村 亨、久保純子、里口保文、那須浩郎

渉外委員会

白井正明（委員長）、石輪健樹、卜部厚志、百原 新、植木岳雪

学会賞選考委員会

2025 年度：北村晃寿（委員長）、鈴木毅彦、阿部彩子、須貝俊彦、三田村宗樹

論文賞選考委員会

2025 年度：苅谷愛彦（委員長）、池原 研、塚本すみ子、森先一貴、青木賢人
名誉会員候補者選考委員会

田村 亨（予定）、久保純子、鈴木毅彦、江口誠一、前杢英明

法務委員会

水野清秀（委員長）、兵頭政幸、池原 研、岡崎浩子、高原 光

特別委員会 オンライン委員会

久保田好美（委員長）、中西利典、下岡順直、出穂雅実、目代邦康

特別委員会 学会設立 70 周年記念事業委員会

鈴木毅彦（委員長）、池原 実、須貝俊彦、北村晃寿、山田和芳、藤原 治、吾妻 崇、納谷友規
選挙管理委員会 ※ 2026 年度に決定

評議員会議長 2025 年度：須貝俊彦、議長代理 苅谷愛彦

会計監査 2025 年度：三浦英樹、卜部厚志

2025 年 7 月 13 日現在（敬称略）

日本第四紀学会 2025-2026 年度役員選挙結果の報告（答申）

2025 年 5 月 13 日

日本第四紀学会選挙管理委員会 委員長 高橋尚志
委員 酒井恵祐
委員 西澤文勝
委員 星野安治
委員 岩本直哉

日本第四紀学会会則第 11 条、第 12 条および役員選挙規程に基づき、2025-2026 年度の役員選挙を行いました。経過、結果、ならびに今回の選挙に関するコメントを報告いたします。

1. 経過

- 1) 第 1 回委員会を 2 月 17 日（月）にオンラインにて開催した。委員会成立を確認した後、委員会構成と連絡先、会則および役員選挙規程、選挙人の数、被選挙権を有しない正会員（選挙種別ごと）、評議員の領域別定数、選挙日程と方法、ウェブ投票システム、会報と学会ウェブサイトと ML による選挙案内などについて確認を行った。
- 2) 「役員選挙の実施と候補者受付について（会告）」および各種届出様式について確認を行い確定した。
- 3) 以下の日程で選挙を実施することとした。
 - 3 月 1 日（土）役員選挙会告
 - 3 月 20 日（木）立候補・推薦届受付〆切
 - 3 月 27 日（木）立候補・推薦辞退届受付〆切
 - 4 月 4 日（金）選挙会告（2 回目）
 - 4 月 4 日（金）正午～25 日（金）正午 投票（電子）期間
 - 5 月 13 日（火）投票結果の確認、当選人と次点者の確定
- 4) 3 月 20 日（木）に立候補・推薦届出書提出を締め切った後、本人確認を行い、候補者および推薦者に候補者一覧表を送付した。その後、例年より遅れたものの 4 月 3 日（水）に候補者辞退届提出を締め切った。候補者辞退届は提出されなかった。会長候補者は 1 名、副会長候補者は 2 名と確定し、それぞれ定数以内であるため無投票当選となった。そのため投票は評議員の選出のみを対象とすることとなった。
- 5) 4 月 4 日（金）正午から 4 月 25 日（金）正午まで、評議員の選出を対象としたウェブ投票を会員マイページにて実施した。
- 6) 4 月 28 日（月）15:00～15:30 に、ウェブ会議システム（Zoom）を用いて選挙管理委員が立ち会いをしたうえで、事務局による開票作業と投票結果の受け渡しが行われた。
- 7) 第 2 回委員会を 5 月 13 日（火）にオンラインにて開催した。委員会成立を確認した後、ウェブ投票結果の確認を行い、当選人と次点者を確定した。答申についても検討を行い、その後確定した。
- 8) 選挙権（投票権）をもつ正会員 764 名のうち 102 名から投票があった。投票率は 13.35% であった。領域別の投票率は、領域 1 が 9.24%（投票数 353 / 投票枠数 3,820）、領域 2 が 9.28%（投票数 638 / 投票枠数 6,876）、領域 3 が 8.22%（投票数 377 / 投票枠数 4,584）、領域 4 が 8.02%（投票数 490 / 投票枠数 6,112）、領域 5 が 8.32%（投票数 318 / 投票枠数 3,820）であった。

2. 立候補・推薦候補者の受付結果（受付順・50 音順）

それぞれの役職に対して、下記会員からの立候補・推薦があった。会長候補者、副会長候補者はそれぞれ定数以内であり、無投票当選となった。

- 1) 会長（定数 1 名）
北村晃寿（領域 4、推薦、推薦者：鈴木毅彦・須貝俊彦）・・・無投票当選
- 2) 副会長（定数 2 名）
藤原 治（領域 2、推薦、推薦者：北村晃寿、鈴木毅彦）・・・無投票当選

横山祐典(領域1、推薦、推薦者:北村晃寿、須貝俊彦)・・・無投票当選

3) 評議員

なし

3. 評議員選挙当選人

選挙の結果、下記会員が当選となった(50音順)。次点者を含めて報告する。

領域1(気候変動及び海洋の諸プロセス):定数5名

阿部彩子、池原 実、久保田好美、加 三千宣、田村 亨、(次点)池原 研

領域2(陸上の諸プロセス):定数9名

吾妻 崇、石村大輔、奥野 充、苅谷愛彦、久保純子、穴倉正展、白井正明、須貝俊彦、堀 和明、
(次点)小松原純子

領域3(層序と年代基準):定数6名

青木かおり、里口保文、菅沼悠介、塚本すみ子、長橋良隆、納谷友規、(次点)竹下欣宏

領域4(人類と生物圏):定数8名

出穂雅実、海部陽介、齋藤めぐみ、中塚 武、那須浩郎、林 竜馬、百原 新、米田 穰、(次点)
森先一貴

領域5(現代社会に関わる第四紀学):定数5名

石原与四郎、植木岳雪、三田村宗樹、目代邦康、山田和芳、(次点)青木賢人

4. 役員選挙(事務)に関するコメント

- 1) 投票率が約13%と前回選挙よりもさらに低い数字であった。今回から郵送による投票は廃止されウェブシステムのみでの投票となったが、選挙について会員の目に触れる機会がさらに減ったことも影響している可能性がある。学会MLで案内を行ったが、この他に学会として投票を促す方を講じる必要がある。
- 2) 今回の選挙では、評議員選挙の立候補者はいなかった。投票率も含め、学会MLで候補者受付に関する案内を行ったが、学会としても何らかの対策が必要であると考えられる。
- 3) 選挙の透明性の確保およびリスク軽減の観点から、ウェブ投票であっても事務局による開票時に選挙管理委員の立会人を設ける形が望ましいが、役員選挙規程にその規程が無かったことが今回判明した。そのため、役員選挙規程に、選挙管理委員による対面、もしくはウェブ会議システムなどの電磁的な方法による開票への立ち合いについて明文化することを提案したい。

以上

◆日本第四紀学会 2025年度第1回評議員会議事録

日時:2025年7月7日(月)14:00~15:00

方法:Zoomシステムを用いたオンライン開催

出席者:北村晃寿(会長)、藤原 治(副会長)、
横山祐典(副会長)、<以下、評議員>
苅谷愛彦(副議長)、青木かおり、池原 実、
石原与四郎、出穂雅実、奥野 充、久保
純子、久保田好美、加 三千宣、穴倉正展、
白井正明、菅沼悠介、田村 亨、中塚 武、
納谷友規、林 竜馬、堀 和明、三田村
宗樹、目代邦康、森先一貴、山田和芳
以上24名

委任状:議長委任9通

オブザーバー参加:鈴木毅彦、齋藤文紀(以上、
会長経験者)、齋藤咲良(事務局:春恒社)

北村晃寿会長の冒頭挨拶の後、定足数確認によつて評議員会が成立していることを確認した。その後、北村会長より2025年度の評議員会議長に須貝俊彦評議員、議長代理に苅谷愛彦評議員がそれぞれ推挙され、全会一致で承認された。以降は苅谷議長代理によつて議事が進められた。最後に藤原 治、横山祐典両副会長の挨拶で閉会となった。

1. 報告事項

特になし

2. 審議事項

(1) 評議員次点者繰り上げ（承認）

北村会長から評議員に欠員が生じていることが報告された。会則第12条3に従い、欠員が生じた領域について下記の次点者を2025-2026年度評議員とすることが承認された。

領域2 小松原純子 会員

領域4 森先一貴 会員

(2) 新執行部会員（常設委員会委員長・領域代表）（承認）

北村会長から2025-2026年度執行部会員（常設委員会委員長・領域代表）について説明があり、会則第16、17条に従い下記のとおり承認された。

会長 北村晃寿

副会長 藤原 治、横山祐典

庶務委員長 齋藤めぐみ

会計委員長 納谷友規

編集委員長 石原与四郎

行事委員長 池原 実

広報委員長 目代邦康

渉外委員長 白井正明

領域1代表 加 三千宣

領域2代表 奥野 充

領域3代表 長橋良隆

領域4代表 中塚 武

領域5代表 三田村宗樹

(3) 2025年度各委員会の構成委員、会計監査等（承認）

北村会長から、会則等の規程を確認しながら、2025年度各委員会の構成委員、会計監査等について説明があり、【資料1】のとおり承認された。なお、未決定である名誉会員候補者選考委員会委員（領域1選出）については次回評議員会にて審議することとなった。

【資料1】 2025年度委員会・会計監査

庶務委員会

齋藤めぐみ（委員長）、オブラクタ・ステーブン、吾妻 崇、水野清秀、山田和芳

会計委員会

納谷友規（委員長）、平林頌子、堀 和明、海部陽介、植木岳雪

編集委員会

石原与四郎（委員長）、坂下 涉、後藤秀昭、小松原純子、青木かおり、宮入陽介、井上 淳、

岩瀬 彬、小森次郎

行事委員会

池原 実（委員長）、穴倉正展、西澤文勝、林 竜馬、小荒井 衛

広報委員会

目代邦康（委員長）、田村 亨、久保純子、里口保文、那須浩郎

渉外委員会

白井正明（委員長）、石輪健樹、卜部厚志、百原 新、植木岳雪

学会賞選考委員会

北村晃寿（委員長）、鈴木毅彦、阿部彩子、須貝俊彦、三田村宗樹

論文賞選考委員会

苅谷愛彦（委員長）、池原 研、塚本すみ子、森先一貴、青木賢人

名誉会員候補者選考委員会

未定（領域1）、久保純子（領域2）、鈴木毅彦（領域3）、江口誠一（領域4）、前李英明（領域5）

法務委員会

水野清秀（委員長）、兵頭政幸、池原 研、岡崎浩子、高原 光

特別委員会 オンライン委員会

久保田好美（委員長）、中西利典、下岡順直、出穂雅実、目代邦康

特別委員会 学会設立70周年記念事業委員会

鈴木毅彦（委員長）、池原 実、須貝俊彦、北村晃寿、山田和芳、藤原 治、吾妻 崇、納谷友規

選挙管理委員会 ※2026年度に決定（予定）

評議員会議長 須貝俊彦、同副議長 苅谷愛彦

会計監査 三浦英樹、卜部厚志

（敬称略）

(4) 評議員会規程の一部改正（承認）

北村会長より名誉会員の評議員会出席を取りやめる評議員会規程の一部改正に至った理由について説明がなされ、審議の上で下記の改正案が承認された。

改正案

該当部分のみ抜粋（変更部分は下線で示し、見え消ししている）

[構成]

第3条 評議員会は会長、副会長と評議員によって構成される。会長経験者および名誉会員は評議員会に出席し、意見を述べることができる。会長が必要と認める場合には、評議員以外の者を評議員会に出席させることができる。

(5) 領域規程の一部改正（承認）

北村会長より、渉外委員会委員の選出方法に関する領域規程の一部改正に至った理由について説明がなされ、審議の上で下記の改正案が承認された。

改正案

該当部分のみ抜粋（変更部分は下線で示している）
[委員の選出]

第9条第5条に掲げる領域内の活動の推進および学会会務を遂行するため、領域幹事ならびに各領域に所属する会員の中から以下に示す委員を若干名選出する。

(1) 庶務委員

(2) 会計委員

(3) 編集委員

(4) 行事委員

(5) 広報委員

2. 渉外委員の選出は渉外委員会内規に従う。

3. 意見交換

(1) メーリングリスト作成について

2025-2026年度評議員のメーリングリスト作成について説明があり、対応することとした。

以上

◆日本第四紀学会 2025年度第1回新旧合同執行部会議事録

日時：2025年7月7日（月）16:00～17:35

方法：Zoomシステムを用いたオンライン開催

出席者：北村晃寿（2025年度会長、2024年度副会長）、鈴木毅彦（2024年度会長）、横山祐典（2025年度副会長、2024年度領域1代表）、藤原 治（2025年度副会長）、須貝俊彦（2024年度副会長）、山田和芳（2024年度庶務委員長）、齋藤めぐみ（2025年度庶務委員長）、堀 和明（2024年度会計委員長）、納谷友規（2025年度会計委員長）、苅谷愛彦（2024年度編集委員長）、那須浩郎（2024年度広報委員長）、目代邦康（2025年度広報委員長）、池原実（2024-2025年度行事委員長）、白井正明（2024-2025年度渉外委員長）、加三千宣（2025年度領域1代表）、吾妻崇（2024年度領域2代表）、奥野 充（2025年度領域2代表）、中塚 武（2025年度

領域4代表）、小荒井 衛（2024年度領域5代表）、三田村宗樹（2025年度領域5代表）

欠席者：石原与四郎（2025年度編集委員長）、海部陽介（2024年度領域4代表）、里口保文（2024年度領域3代表）、長橋良隆（2025年度領域3代表）

オブザーバー参加：齋藤咲良（事務局：春恒社）

北村晃寿 2025年度新会長の挨拶によって開会され、新会長の司会進行のもと、引継ぎに関する議事が進み、閉会した。

(1) 会長、副会長、各常設委員会、各領域、各特別委員会の新旧での引継ぎ内容と課題の確認を行った。

(2) 定例となる会員動向についての報告がなされた。

以上

★★★ 情報をお寄せください ★★★

日本第四紀学会では、第四紀通信のほか、メーリングリスト（ML）、学会ウェブサイトを用いて情報発信をしております。メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス（[jaqua-koho\(at\)quaternary.jp](mailto:jaqua-koho(at)quaternary.jp)）へご投稿ください。

情報発信の手段として、MLの積極的な使用をお願いします。MLへのご投稿についての詳細は、第四紀通信第29巻第4号の巻末をご覧ください。ウェブサイト（<http://quaternary.jp/>）でも閲覧可能です。

第四紀通信には主催・後援イベントなど学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報を、ウェブサイトには主催・後援イベントなどのほか「公募・助成」情報等を掲載します。

広報委員会

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : [daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com) 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176